

2025



十三公民館だより

発行 十三公民館

TEL・FAX 91-1755

入学おめでとう!!

4月9日水曜日午前9時15分から、湖南小学校令和7年度入学式が同校体育館で行われました。

式辞では、山口千香子校長から新入学児童17名（男子13名・女4名）に対し、頑張ってほしい、三つの「あ」の話をされました。

一つ目は、安全・安心の「あ」として、自分のいのちを大切にするため、車に気を付けて、事故



に遭わないよう道路への飛び出し、川や用水に近づかず危ないことはしない。

二つ目は、あいさつの「あ」として、おはようございます、さようならそしてありがとうございますと挨拶をする。

三つ目の「あ」は、あとしまつの「あ」として、自分のことは、自分でしっかりとすることで、自分でできることをどんどん増やし、三つの「あ」をしっかり守り、仲良しの友達をたくさんつくりましょうと話しました。



同日午後2時から十三中学校の入学式が同校体育館で行われ、新入生34名に対し、瀬戸一太校長から三つのことをお願いされました。

一つ目は、自分で考えて行動し、学ぶことができる生徒になって欲しいとして、授業や活動では、時として間違ったり失敗したりすることもあると思いますが、それらは皆さんを大きく成長させる貴重な体験でありチャンスです。友達との学びの中で分かることや出来ることを一つ一つ積み上げ、学ぶ楽しさや面白さを感じてください。



二つ目は、自分や友達を大切にして思いやりをもち、助け合える生徒になるため、お互いの意見や考えの違いを個性として、認め合い高め合い、友達と支え合って楽しい学校生活を送ってください。

三つ目は、自分の夢や目標に向かって努力し続ける生徒になるため、夢をもちそれに向かって努力することが、素晴らしい人生を築く基礎となります。中学校三年間の間に夢をしっかりしっかりもって夢のため努力してくださいと話しました。



十三地区の史跡・伝承

神代地区

お茶坊石

旧蒲田温泉の屋敷跡に、高さ一メートルほどの一対の陰陽石がある。俗に、^{ジジババイシ}爺婆石とよばれている自然石がある。昔は蒲田から高岡市五十里へ抜ける峠にあった。急な坂道を登ってきた人々は、この峠で休憩し、この一対のほほえましい石を見て、疲れをいやしたことだろう。

かつて上杉謙信が飯久保城を攻めあぐんだ時、この石のことを聞いたので、石に向かい「我に利^{キズイ}あらば奇瑞を示せ」と言い、家来に命じて、石を谷底へ落した。

石はその夜のうちに元の場所に戻っていた。謙信は勝利は我にありと家来を励ましたので、飯久保城はたちまち落城したという。

仏生寺地区

鉾 根

その昔、源義経が都落ちし、奥州をさして逃げる途中、加賀・能登を経て、当地の「宮田」という所の山の上の高の宮に参詣し、鉾を納め、武運を祈り、道中の平穏を祈願したという。

その故に、宮田の麓に住んだ村人たちは、この故事をもって、集落を「鉾根」と命名したと言い伝えられている。

集落の南方の山を^{オハイ}御林山といい、その東端の稜線に「城山」と称する地がある。飯久保城の^{ツメ}詰め城であつたらしく、遺構は城郭を囲む堀切三か所という簡素な縄張りが見られる。

飯久保城落城とともに、この城も落ち、城主の子二人は出家して僧となり、長兄は赤毛の西念寺を創立し、弟の善西は唯明寺を創立した。

城山の麓には「千石原」「^{アマホ}尼圃」の地名が残っており、「鉾根の御坊」は、千石原にあつたらしい。

唯明寺の開基善西は、本願寺第八代の蓮如上人に帰依し、真言密教から真宗に転派し、大永三年(一五二三)現在の地に寺を創建した。真言宗当時の經典や仏具等は集落の中央部の山の上に埋蔵し、この塚は今、「経塚」と称されている。

寺の境内に、義経が腰掛け、しばし休憩したと言い伝えられる大きな石がある。

また、この寺の五代目の立正という方が大阪の石山合戦に、村の^{オオタロウ}大太郎藤左衛門以下数人を率いて出陣し、大いに功あり、後に延宝六年、本願寺常如上人より当時八代目長雲は「親鸞^{ミタシノゴエ}聖人御首之御影」を賜り、寺宝として大切にされ、現存している。

5月の講座・サークル案内

講座名	曜日	実施日	時間	団体・講師名
詩吟	月	12日・19日・21日	13時30分～	大賀さよ子先生
詩吟	水	7日・14日・21日・28日	10時30分～	平井静子先生
手芸	火	6日・13日・20日・27日	13時00分～	
茶道(保育園)		休 講	10時30分～	みどり保育園
三味線	木	8日・22日	19時30分～	山下茂昭先生
バランスボール	日	18日・25日	10時30分～	浦野 司先生
オカリナ	金	9日・23日	14時00分～	尾崎春夫先生
3B体操	木	1日・8日・15日・22日・29日	14時00分～	堀川絹代先生